

和41年から創の一次治癒をめざして、本法を各種手術に応用し、真空嚢を簡易化し、吸引管をより効率高く改良した。超低圧の利点は径3mmの細い吸引管で、死腔閉鎖、圧迫止血が充分行われることで、サージバックなどの軽い陰圧では不十分である。乳癌、直腸癌、甲状腺、胸囲膿瘍、膿胸、腹壁瘻痕ヘルニア手術などへの応用を供覧した。またこの改良吸引管の各種応用についても述べた。

51. 当部に於ける MOF 症例

橘川征夫, 渡辺 敏, 稲葉英夫 (集中治療部)
庵原昭一, 西沢正彦, 三沢博文 (救急部)

52. 術後呼吸不全の治験例

—呼吸管理における PEEP の効用について—

十川康弘, 大和田耕一, 瀬戸屋健三,
大山欣昭 (住友重機浦賀)

術後腹腔内感染症を併発した場合には肺循環血液の阻害から肺胞の広範な虚脱を生じ所謂 ARDS の状態に陥ることが多い。術後呼吸頻度をみた場合には胸部レ線所見と血液ガス分析を行い ARDS と診断した場合には、PEEP を加えた人工呼吸が有効である。最近術後 ARDS の一治験例を得たので溺水の1例と合わせ報告する。

53. 吸収性スポンジによる開胸術後の皮下気腫防止法

川上義弘, 松本明石, 武野良仁 (日産玉川)

開胸術後にみられる皮下気腫を予防する新しい方策について臨床的に研究する。方法は、開胸時肋間に吸収性ゼラチンスポンジをU型にたたんで挿入し、気密を計る。皮下、皮膚の縫合は余り密にしない。以上の方法を開胸例92に応用し、術後皮下気腫の防止に対し良好な成績をおさめた。またこの方法による膿瘍などの合併症はなく、創治癒に対しても問題はなかった。

54. flail chest の経験

笠井妥陵, 熊谷信夫, 飯沼克博, 井上育夫,
森川不二男 (長野県立須坂)

flail chest を伴う重症な胸部外傷例の治療は従来の胸腔ドレナージや酸素療法のみでは救命が困難であった。最近、受傷後比較的早期に気管内挿管による内固定を行い、血液ガス分析を参考にしての呼吸管理、更には肋骨の鋼線牽引による胸廓の外固定の併用で救命に成功した。操作の容易な全自動血液ガス分析装置の導入で煩

雑なチェックも可能となり、精度の高い respirator の導入で、種々の形態の呼吸管理も可能となり、治療に有用であった。

55. 当院開設以来15年間の手術症例の検討

三 枝 一 雄 (三枝病院)

当病院は昭和43年9月15日に開設し、今年で15周年を迎えたので、これを機に手術症例を検討してみた。その総数は1299例であり、これらを手術臓器別にみると虫垂手術557例、胃手術339例さらにはヘルニア、腸手術の順になる。その中、今回は初期5年、中期5年及び後期5年に分けて手術例の推移を検討した。初期には骨折手術もかなりあったが、最近では腸手術が多くなってきている。さらに、胃悪性腫瘍110例、腸悪性腫瘍30例(中、肉腫4例)について検討した。さらに2, 3の症例を紹介した。

56. 胸骨下部欠損に対する Sabiston 法の経験

横山 宏, 大崎逸朗, 本宮 建,
松清 央 (君津中央)

上腹部正中腹壁欠損(腹直筋離開)、胸骨下部欠損、横隔膜欠損、心嚢欠損、心奇形(心室憩室の疑、右軸偏位)のある Cantrell 症候群の成熟児の根治手術において、胸骨下部欠損の修復に Sabiston 法を応用し良好な結果を得た(手術時日令47日)、胸骨下部欠損に本法を施行した報告は極めて少ない。施行に当って下部肋軟骨の癒合が問題であるが、切離あるいは外側での切開も可能であり、直接縫合閉鎖の困難な新生児期を過ぎた症例に応用が可能である。

57. 千葉県内 50 ベッド以上病院における消毒剤の使用実態調査

樋口道雄, 古山信明 (千大・手術部)

千葉県内の各病院における消毒剤の使用実態を調査し、院内感染防止に役立てたいと考え、50ベッド以上の114病院に、次のような5項目についてアンケート調査を依頼し、81病院より回答をいただいた。(回答率71%)
アンケート項目は、Ⅰ皮膚の消毒、Ⅱ器械器具、Ⅲ繊維類、Ⅳ汚物類、Ⅴ施設の消毒である。

回答協力病院を、国公立病院34施設(A群)とその他の病院47施設(B群)に分けて比較検討した。

その結果、各施設ともそれぞれの環境に適した消毒法を行なっているように考えられた。今後益々院内感染防止に努力せねばならないと考えている。